

書評

少しばかり「大きな物語」として見晴らす日本資本主義

福田 幸正
客員研究員
(公財) 国際通貨研究所

寺西重郎、2018、「日本型資本主義 その精神の源」、中公新書

本書は、マックス・ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」の考え方を手がかりにして、宗教の視点から日本の経済システムの基層的特質を追究したものである。今までの日本経済論は西洋由来の「大きな物語」との比較か、思いつきのモデルの提示でしかなかったと主張して、著者は異種資本主義の精神の時代を見据えた「大きな物語」の構築を試みている。

著者はその『経済行動と宗教 日本経済システムの誕生』（勁草書房、2014年）で鎌倉新仏教の易行化（当時の大衆救済の必要性の高まりに対応し、比較的容易な宗教実践で悟りに達し、救済が受けることができるとするもの）が日常的な職業・芸術行動のなかで宗教的世界観・人生観を追究するという求道主義をもたらし、それが日本の経済的価値観の源流を形成したという基本仮説を示したが、「日本型資本主義についてこうした見方もあるのだというメッセージを、できるだけ多くの読者に向けて発信したいという気持ちから」（p.270）追加的な補強を施し、此の度新書化したと、本書のあとがきで述べている。なお、著者は2014年と2018年の著作の間に『歴史としての大衆消費社会 高度成長とは何だったのか？』（慶應義塾大学出版会、2017年）を発表し、高度成長期に焦点を置いて前述の基本仮説の応用を試みており、これら三著作は一連の研究成果といえる。

本書のまえがきにそのエキスが述べられており、以下に主要箇所を若干整理して抜粋してみた。

-
- 日本資本主義の精神の淵源は、西洋におけるプロテスタンティズムに匹敵する形で鎌倉新仏教にまでさかのぼることができる。宗教の影響は時代とともに弱まったが、近現代でもこの精神は、日本型企业システムなどの形で制度に組み込まれ、日本資本主義の特性とされる“ものづくり”へのこだわり、技能形成を重視する労働市場の特性、関係を重視する金融システムのあり方、自然に密着した生活の意識と様式など、日本の現在の経済システムに色濃く残っている。
 - 西洋では16世紀から17世紀にかけての宗教改革の時代に生まれたプロテスタン

ティズムに端源を持つ、禁欲的な職業精神と功利主義的な公共の厚生を重視する姿勢が、自然を人間の厚生のために利用しようとする人間中心主義の自然観とともに、その大量生産資本主義の精神的バックボーンをなし、産業革命につながった。

- 一方、日本では、12世紀末から14世紀にかけて、鎌倉時代における仏教の革新の強い影響の下に、求道的職業行動に基づく独自の資本主義の精神が生まれた。この精神が、社会的分業に基づく市場の発展に適合的な道德規律を生み出し、信頼の醸成と協同の高度化などの社会資本の蓄積と、それによる取引コストの低減を通じて、西洋的な産業革命とは異質な、商業と小生産者に基づく江戸時代の持続的な経済成長につながった。現在の日本の経済システムは、日本の伝統的な資本主義の精神の土台の上に、明治以降の時期、西洋的な資本主義の制度・技術とその精神が移植されてきたことによって形成されたものである。
- 資本主義的生産を行う技術や制度は各国でほぼ共通しているが、非西洋で初めて欧米的な近代化が「成功」したとされる日本がさきがけとなって、現在の世界は、それぞれの経済が独自の資本主義の精神をもって西洋由来の資本主義制度を運用するという、異種資本主義の精神の相克、協調、共存の時代に入っている。その中で現在の日本の経済システムは、さまざまなきしみが生じている。今後の日本の経済システムのあり方を考えるには、こうした時代の特質を押さえたうえで、日本の世界経済における立ち位置を考察しなければならない。
- 現在の金融資本主義における、わずかな金利差を利用して地球規模で莫大な資金を動かして巨利を得る「強欲」な金融機関の行動や、資源制約や地球環境制約を考へない世界的な水平分業による大量生産・大量消費・大量廃棄の拡大は、西洋型の近代化がある種の限界に達したことを象徴している。これに対しては、異種の資本主義が西欧的資本主義の暴走を抑え世界資本主義の調和的發展をもたらすことが必要だ。
- 日本では西洋的な工場制機械生産型の産業革命は自生的には発生しなかった。しかし、社会資本的な道德規律の進化と普及に裏づけられた、商業に基づく大量生産システムが日本においても出現した。そのシステムの下で培われた身近な他者との関係を重視する関係依存的な経済行動と、労働の人格的側面の向上をめざすものづくりの伝統、身近な生命をも視野に置く自然との共生の精神など、西洋的資本主義の暴走と、中韓などの儒教的資本主義の拡張主義の持つ欠陥を是正する優れた属性が、日本の資本主義の精神として生き残っている。今後の日本の世界的視野での立ち位置の策定にあたっては、こうした伝統と経験に立ち返って考えることが不可欠であり、日本資本主義の文化は長期的に世界に発信してゆくべき高い価値を有している。
- ポストモダンと呼ばれる現代は、かつてのマルクスの『資本論』やウェーバーの

『宗教社会学』ような「大きな物語」は流行らないといわれるが、今後は異種資本主義の精神の時代に向き合わなければならない日本の経済システムのあり方について、長期の経済社会と文化の歴史を統一的な視点から俯瞰した、「大きな物語」による立ち位置の考察が必要ではなからうか。

政治家の嘘、官僚の腐敗、大企業の不祥事などがこれでもかと連日報道される昨今、人々の精神の荒廃を伴って日本全体が急速に自滅の方向に向かっているような漠然とした不安が世の中を覆っているのではないだろうか。そうであればこそ、今あらためて日本資本主義の文化をその端源にまでさかのぼり、その優れた属性を再認識する意義はあろう。

優れた属性といわれるものに気づいていないのは当の我々日本人なのかもしれない。自分は途上国からの研修員を受け入れる事業にも携わっているが、最近ある町工場を訪問した際、彼らが特に感銘を受けたとした点を以下にいくつか紹介したい。

- 新製品開発の方法は、経営者が直接顧客の現場に出向き、顧客のニーズにじっくり耳を傾け、議論し、試行錯誤を重ね、密接に協同して取り組んだという点。その結果、顧客に喜んでもらえることが経営者の至福でもあるということ。(これは、著者の言うところの「身近な他者」との関係を重視する関係依存的な経済行動の具体的な姿であろう)
- 各労働者は、担当作業の経営面や全体工程における位置づけを的確に理解しており、それを他人にも説明できること。
- 経営者と労働者の間に人間的な隔たりが感じられないこと。
- 従業員の礼儀正しく勤勉な態度、狭いながらも整理整頓された作業場、執務室。

日本の伝統的な資本主義の精神のよさを世界に向けて発信するには、以上のように日本人の働く現場を直に見せ、経営者や従業員と交流してもらうことが極めて効果的と考える(日本には約128万人(2017年10月末現在)にもものぼる外国人労働者がいることも無視できない)。日本資本主義の文化が真に価値があるものであれば、労せずとも口伝えで広がっていくはずだ。強いて言えば、外国人との仲介役には、本書が目指したような日本の経済社会を「大きな物語」として大局的に見晴らすことができるセンスがあれば、より望ましい。

なお、著者は2014年以降の著書の執筆にあたって常に念頭にあったのは、2011年の東北大震災で親兄弟を失った少年少女たちが口ぐちに言っていた「将来、人のためになる人間になりたい」という言葉であったという。国でもない社会でもない「人」す

なわち身近な他者のために役に立つ人間になりたいという言葉は、日本の経済社会の成り立ちを象徴している、と 2017 年の著書のあとがきで述べている (pp.353,354)。そして、新古典派経済学の背景にある「キリスト教的世界観」と東北の少年少女たちの世界観の違いを明確に意識したうえでなければ、今後の日本経済の在り方に関する適切な処方箋は描けないのではないか、としている。この点に関して、思い出すのは、最近まである東南アジアの途上国で一緒に働いた本邦民間コンサルタント会社のベテランチームリーダーの朴訥な言葉だ。日本の学生一行が僻地のプロジェクトサイトを見学に訪れた際のささやかな歓迎会の冒頭に述べたものだった。「わたしたちは、少しでも貧困に苦しむ途上国の人たちの役に立ちたいと願っているのです。」これも日本型とどうかどうかはさて置き、大切にしたいこの上なく美しい文化だと思う。

世界に向けての発信として、本書の英語版が刊行される予定という (仮題 *Culture and Institutions in the Economic Growth of Japan*)。海外の反響を早く知りたいものだ。